



ASSOCIATION FOR RENGEIN TANJOJI
INTERNATIONAL COOPERATION.

認定特定非営利活動法人

れんげ国際ボランティア会

みろくの風

Vol
68



ミャンマー新任教師スキルアップワークショップ



- contents -

目次

- 国の発展は人材育成にあり 2・3
アルティック・ヤンゴン
プロジェクト・マネージャー クアン・イー・ウー
- ミャンマー通信 4・5
現地新聞インタビュー
アルティック・ヤンゴン所長:平野喜幸
- 敗戦の日本人を救った国際支援 6・7
命を繋いでくれたララ物資
- 西日本豪雨支援、熊本震災支援 8

国の発展は人材育成にあり

クアン・イー・ウー アルティック・ヤンゴン

(プロジェクト・マネージャー)

当会ではこれまで、子供たちの教育環境を改善することで、ミャンマーの教育のレベルアップを推進してきました。しかし、ここ数年で気づいたことは教師たちのスキルアップの必要性でした。長い間軍政が続ぎ、人心の荒廃したミャンマーでは、高い志を持った教師たちが不足しています。当会ではミャンマー政府に働きかけ、定期的な教師研修プログラムの実行とそのための研修施設の建設を行うこととなりました。ミャンマーにおいてNGO(海外の民間団体)に許可が下りて、このようなことが実行されるのは初めてで、ミャンマー教育界はもちろん、各方面から大きな期待を集めています。(当会がモデルケースとして設立したこの施設は数年後にはミャンマー国に移管され、国レベルでの教師育成が行われる予定です)。

ミャンマー・イラワジ管区での開発事業(学校建設を中心とする農村開発)は5年が過ぎました。アルティックは地域の教育環境改善のため、これまでに71校の学校を建設しました。しかし、教育現場の問題はまだまだ改善の余地があります。ミャンマー政府が一番達成させたことは学生の合格率です。ですから、今後の教育方針もそこに力を入れて、いくつも新しい政策を立てています。さて、多くの学校での進級合格率は、1年生から9年生まではほとんど百パーセントですが、10年

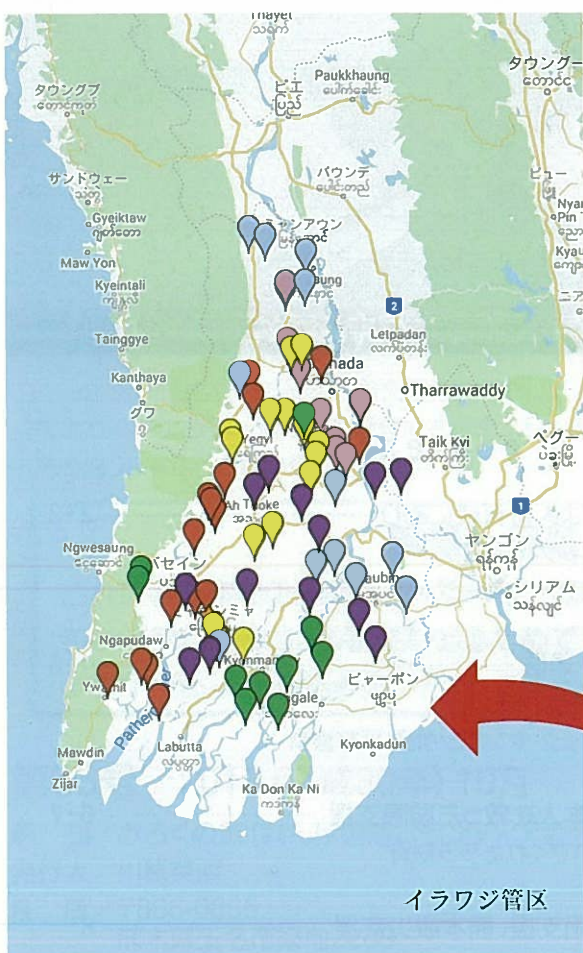
生の合格率は激しく落ちています。管区(州)教育事務所和学校への指導は、「小・中学校において一人として落第させてはいけない」というものです。ですから子供たちは学校に行つてあまり勉強しなくても年々合格できるようになりました。また残念なことに、多くの先生たちは最低限のことしか教えません。この現象の後ろにはもっと厳しいミャンマーの教育問題が隠れています。

まず、先生の質が低く、人数が足りません。ミンガユ中学校元校長先

生ドー・ダندان氏の話によると、新米の先生は学校に来て何もできないし、先生本人の振る舞いや責任さえ充分に分かっていないという状況です。また、アツテピョン高校校長先生ドー・タンダーチョ氏は、中学校の先生たちは校内で会議をしても何の意見も出さず、協力もしてくれません。まるで「ゴードージ」(彫像のように動かない)と言われました。さらに、オーシー高校校長先生ドー・カインチョカン氏は、高校ならば最低でも教師が13人は必要ですが、政府からは4人しか配置されません。そして中学校教師から昇進した高校の先生は「科目が難しすぎるので教えられない」と平気で言います。

先生の人数が足りない問題は、政

府が力を入れないと無理ですが、質ならば個人の問題だと思えます。残念ながら、多くの先生たちが教育の道を選んだ理由は熱意と興味ではなく、安定的な収入のためです。ですから仕事の量は少なければ少ないほど良いと考える先生が少なくありません。非常識にも、学生にお酒を飲ませたりする先生や学校に行かない校長先生の噂も時々耳にします。



学校建設場所(71カ所)



急ピッチで建設が進む人材育成研修センター

自発的に子供たちを教え、能力を育てて向上させたいと考える先生は多くいません。つまり、志を持って胸を張って師の道を堂々と歩く先生が少ないのです。これが、先生たちの質が低くなる大きな理由だと思います。



この問題を改善するために、アルティックは単にハードウェア（建築物）を提供するだけでなく、ソフトウェア（研修や指導など）に手を下さなければならぬ状況になりました。

私たちはこのことに関して、半ぐらい政府と交渉をしましたが進展がありませんでした。そこで、心ある国会議員と日本財団から教育省にプレッシャーをかけ、数カ月後に

やっと許可をもらいました。そして2018年5月1日に第1回若手先生研修を開催しました。この研修は当会が第二フェーズで建設した25校から教師経験が5年弱の新米の先生28人を選んで行われました。研修場所は今後研修センターを建てる予定地の近くのミンガウ中学校でした。

この研修は、参加者が自ら問題点や課題を意識し、それを変えていくという気持ちで育てるのが目的です。手法としてはおもにグループディスカッションのやり方を取り入れました。

今回の研修で力をお借りしたのが、ANA総合研究所の小田切義憲主席研究員と囲碁の安田泰敏主席でした。以前からミャンマーの先生たちに囲碁を通してコミュニケーションのスキルアップを教える事業を行っているので、ご協力をお願いしたところ、快く引き受けて頂きました。

研修の5日間の日程が決められました。

第1日目は小田切さんが囲碁ゲームとチームビルディング（※1）を行いなから参加者のやる気を高める1日でした。2日目はクアン・イーからグループディスカッションの流れやポイントがレクチャーされました。

3日目はアルティックの平野ヤンゴン所長が教育と人生の哲学的な質問をし、これを参加者がグループで議論し、グループごとに発表をしました。4日目はイラワジのシニア教育家3人、ドー・サンテー氏、ドー・ダンダン氏とウー・ダンソーが経験に基づきそれぞれの教育人生を参加者に話しました。夜は研修に参加した全員に今後の自分の実践計画をまとめてもらい、最終日の5日目の朝は一人一人がそれを発表して研修が終わりました。



研修開始の際に、参加者28人の中に半数の14人は「この研修に参加したくなかったが校長先生の命令でしぶしぶ来ました」と率直に言いました。しかし、研修最終日には全員が希望溢れる微笑みで帰りました。

もちろんミャンマー政府も毎年全国で独自の研修会を開いています。しかし、残念ですが先生たちは学んだことを実際の教育の現場で実行することは殆どないと言っています。そこでアルティックでは今回の研修のフォローアップを考えています。それは毎月学校を訪問する時（アルティックでは学校を建てるだけでなく、これまでずっと建築後

定期的に訪問を行っています）、研修で学んだことを必ず実践しているかどうかを確認したり、相談に乗ったりします。例えばシャンイェージョ高校のナンフォンツヒーラ先生は僅かな休憩時間を利用して毎日子供たちと囲碁ゲームで遊びます。また、ミンガクウインのチャン先生はクラス対抗を行うことで子供たちに強くなりたいたいという意識を向上させます。学んだことを自分なりの方法で子供たちと一緒に共有し共に成長する、そして自分が先生になった喜びを感じる先生たちが育つ。これこそこの研修の意義であると考えています。そのためには研修した後のフォローは大変大切なポイントです。

今回の研修はミンガユーの准高校で行いましたが、現在アルティックでは宿泊もできる研修専用の施設を建設中です。そしてこの研修制度を充実、拡張させることで、先生たちの意識を向上させ、教育のレベルアップをはかり、ミャンマーの未来を担う子供たちを育てていくことを夢見ています。

※1

チームビルディング

個々のスキルを高めながらもチーム全体が丸となって目標を達成する方法を学ぶこと



平野ヤンゴン所長(中央)と現地スタッフ

平野インタビュー



全国で消費される「噛みタバコ」の金額は、ミャンマー政府が建てる学校建設費用よりも多い……

今では当会アルティックのミャンマーでの活動はイラワジ管区(P2の地図参照)の教育関係者においては知らない人はいないといつても過言ではありません。マスコミの関心も高く、平野所長も何度も取材を受けています。平野所長は今回のインタビューで、「スーチーさんは実力のあるリーダーです。しかし、彼女一人で国を変えることは不可能です。新政権が軍政府に圧勝して2年が経ちますが、ミャンマーの本質は何も変わっていません。それどころか、世情は以前よりも悪くなったような気がします」と述べています。

記者：ARTIC(れんげ国際ボランティア会)はミャンマーでどのような事業をやっているか紹介してください。

平野：私の名前は平野喜幸、ミャンマーの名前をウーセタナと申します。私はARTIC (Association for Rengain Tanjo: International Cooperation「れんげ国際ボランティア会」)のプロジェクトディレクターであります。我々の団体は1980年に日本に設立されました。仏教系のINGOです。私たちの母体は日本のお寺です。4,000人以上の信者さんたちがARTICに資金を支援しています。その資金をほかの国の人たちのために使います。しかし、今私がやっているプロジェクトに関しては日本財団が支えていて私たちは学校を造っています。元大統領のU Thein Sein(ウー・テインセイン)は日本財団の笹川会長に、彼の地元であるイラワジ管区に学校を造るようをお願いをしました。それで、日本財団から私に連絡があり、ミャンマーで活動

してもらえるように要請が来しました。**記者**：なぜミャンマーを助けようと思ったか？

平野：私は最初にミャンマーへ来たのが2年前です。1996年の10月3日から24日までの3週間、ミャンマーを巡りました。目的は何かというと第二次世界大戦の時、沢山の日本兵士がミャンマーで死にました。その人たちの冥福を祈るため来ました。もう一つは日本が戦争に負けて飢えていた時、ミャンマーはお米を支援したことがありません。そのお米を食べて私たちは生き残ったのです。その恩返しをするため来たのです。最初にミャンマーへ来た時にタマニヤというお坊さんと30分ぐらい会うことができました。その時はスーチーさんが軟禁状態から解放されてこのお坊さんの所に来たところでした。お坊さんはこう言いました。「スーチーさんのデモクラシーはこのタマニヤ山から始まる」と。それから私はミャンマーで働けるといいなあと思ってここで活動するN

GOを探しました。でも見付かりませんでした。それで一旦タイに戻ったのですが5、6カ月後、知り合いのNGOがミャンマーで10年計画の地域開発プログラムをやっていると言ってきたのです。そのチームの要請で私は1998年にタウンジーへ行きました。10年予定でしたがそのNGOが本部との問題があつて4年しか活動することが出来ませんでした。ところがその4年が終わると、こんど日本財団が私と一緒に活動をしなかつてきました。その活動はシャン州でセタナという名で団体を設立し、学校建設をはじめました。今もその団体がシャン州にあります。その先生が私のことをウーセタナと呼んでから今までウーセタナと名づけられたのです。

を実施しています。どんなに教育制度が良くても、教える教師に能力がなければ真の教育を与えることはできません。それが研修センターを造る切っ掛けになりました。**記者**：研修センターの場所、建設費、またいつになったら公開するのか教えて頂けますか。
平野：研修センターはパンタノ・タウンシップ(群)、ミンガユ村に造っています。建設費としてセンターは1,400レックチャット(約1,120万円)、参加者の寮は980レックチャット(約780万円)、他の家具代は200レックチャット(160万円)、合計して2,580レックチャット(2,060万円)ぐらい掛かるだろうと考えています。建設は5月1日からすでに始まっています。10月に終わって11月からセンターが公開されます。しかしこれを研修センターと呼ぶので欲しいと教育事務所に言われています。なのでセミナーと名前を変えて続けることになっています。

記者：現在ARTICが活躍しているのは……？

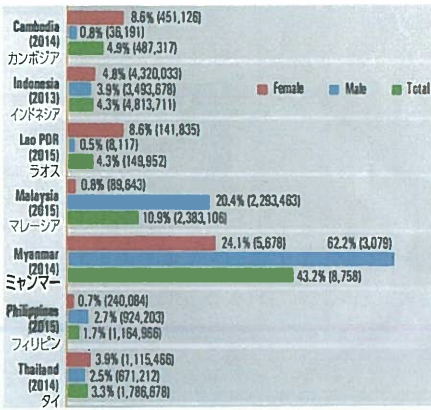
平野：2013年からイラワジ管区に学校建設と地域開発プログラムをやっています。この5年の間で71校を建てました。今後100校まで造る予定です。しかしいくら学校を造っても、基本的なミャンマーの教育制度が変わらなければならぬと感じています。そこで、教師向けの研修センターを造っています。

皆さんもご存知のように教育局の印に「志、規律、教育」と書いています。でも今のミャンマーには志と規律は無くなっています。教育にはその二つが無いと意味がありません。私が尊敬するウータントさんは1931年にこう言っています。「教育には

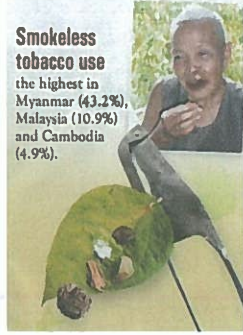
「正直で頑張るイラワジの人たち」と看板に書いてあります。しかし、私の経験からすると、このスローガンの当てはまる村はとも少ないと感じています。正直で頑張らないイラワジの人が多いです。ですから学校建設よりも教師のレベルを上げるのが大事であると考えました。実際に教育事務所からCCA (Child Centered Approach)



街中でも数多く見られる「噛みタバコ」の販売所



アジア諸国における噛みたばこの普及率 (ミャンマーが突出)



噛みたばこ

どんなに科目が良いとしても、実際に教える教師が無能なら無駄だ。それは私も賛成です。ですから研修センター設立を目指しているのです。センターでセミナーを行うことで、きっと先生たちの能力も上がってくると思います。教師経験5年以下の先生たちが優先です。なぜなら年を取って経験も多い人は頑固で変わるのも難しいからです。セミナーは一週間かかります。日本のANA航空(全日空)も私たちを手伝ってくれます。

記者…元政府と現在の政府の下での活躍の違いはどうですか？
平野…私たちのプロジェクトは2013年に始まったので2015年までの3年間はウーテインセンの政府、2016年から現在の2018年まではNLD政府(スー)

チーさんの率いる政府)です。今は以前より世情は悪くなったような気がします。以前の村人は協力的でしたが、今はそうではないです。プロジェクトのために来るお金をどうやって自分のものにするか考える村長もたくさんいます。村の名前は言えませんが、嘘をついてリストを作ったりもします。このような心を変えないとミャンマーは発展する方法がありません。スーチーさんは実力があるリーダーです。しかし彼女一人で国を変えることは不可能です。NLD政府が圧勝して2年にもなりましたが何も変わりません。もっと悪くなったと感じています。国民が政府だけに頼って自分責任を果たさないからです。

記者…学校を作る場合、小、準小、中、高等の中で、どのレベルを優先して造ったのですか？
平野…決まりはないですが中学校が一番多く造って、都市から遠い所を優先して造りました。学校建設をする他団体には幹線道路に近い村に造るところがありますが、私たちは辺りな場所の村に造りました。例えば今年造ったジャウンゴン T S (T S II 群)のタヤエゴン村はジョウンゴン、イエー

ジーとジョンピョウの3つのT Sの間にある学校です。その学校は現在中学校なんです。学生寮を併設するプロジェクトをやっ

て高等学校まで行けるように目指しています。
記者ARTICの学校建設の手順は変わっているか聞いていますが？
平野…私たちのシステムは最初に学校建設をする村を選択して村人に建設費の4分1のお金を集めてもらいます。ARTICが

4分の3を出し、建設が終わったら、村人が拠出した4分1のお金は返して、そのお金で村に役立つ事業をやってもらいます。その事業の利益で村の開発プロジェクトを行ってもらうのです。村人が自分たちの学校だと自覚して、お金のことも几帳面に協力して利用するようにするのが目的です。いくつかの村は私たちに嘘をついたこともあります。外国人の私たちが、どんなにミャンマーに良くなって欲しいと思っても、ミャンマーの国民自身が頑張らなければ何も変わりません。ミャンマー人が悪い習慣を捨ててこそミャンマーは本当に変わるので

記者…イラワジ管区のプロジェクトが終わったら、またどこかに学校を造ろうと考えていますか？
平野…私はこのイラワジだけの責任者です。しかし、私たちの協力団体である日本財団が活躍しているのはイラワジ管区だけではなく、私たちが中心に今年で300の学校が出来上がりました。さらに今後100の学校を建てる予定です。北の方に40校、南に40校とカヤー州に20校建てる予定です。ラカインでも100校が建て終わりました。さらに100校建てようとしています。

記者…ミャンマーでのARTICプロジェクトの成功率はどれくらいあると思いますか？
平野…一部の問題を除くと7割ぐらいは成功しているかと思っています。様々な問題がありましたが、成功したものも多いです。特筆すべきは、幾つかの村で村人が噛みタバコを止めたお金を集めて学校を造ること

が出来ました。ご存知ないでしょうが、全国で食べている噛みタバコ代を集めれば、教育事務所が1年間に学校建設のために使うお金よりも多いのです。ですから政府が学校を建てられないなら村人だけでもお金を集めて造ろうと思えば出来るのです。例えば、私たちがプロジェクトをやっている村に300世帯の戸数があります。一つの家庭が一日に300チャット(約25円)を集めたら1カ月に9,000チャット(750円)になります。その方法で1年に324レック(260万円)集めることができます。知つての通り、噛みタバコは身体に何のメリットもありません。悪影響を受けるだけです。病気を病気に買っていることと一緒です。病気が病気にさらす必要があると述べたいのです。

記者…最後に追加したいことかあれば：
平野…ミャンマーが東南アジアで再びトップレベルの国の立場になるようにミャンマーの人々は頑張つて仕事をして欲しいと願います。一人一人が国を変える気持ちで努力することでミャンマーは本当に変わります。
記者…このようにお時間を頂き、有難う御座いました。

インタビューが行われたのはミャンマーの地元紙The Seeker news Journal紙で、この新聞はヤンゴン、マンダレー、ネピドー、モルミヤイン、タウンジー、パテインなど概ね州や管区的首都(全国の大都市15~20カ所)で販売されており、発行部数は20,000部。

敗戦の日本人を救った国際支援

“命を繋いでくれたララ物資”

かつては私たち日本も支援を受ける側でした。敗戦後の餓死者も出るような状況を見捨てることなく、支援の手を差し伸べてくれた人々が世界に大勢いました。時を隔ててもその恩を忘れることなく、世界の困窮する人々にお返しをしていきたいものです。

ララ物資

第二次世界大戦終戦直後の荒廃した日本では、食料や衣料をはじめとする生活必需品を手に入れるのが大変でした。そんな全てのが不足していた時代に、海外のLARA（ララ）という団体から、たくさんの支援物資が送られてきました。

ララから届いた支援物資はララ物資とよばれ、1946年から52年までに、ミルク類、穀物、缶詰、バターやジャムなどの食料品をはじめ、衣類、医薬品、靴、石けん、学用品のほか、乳牛やヤギなどが届けられました。その総額は、当時のお金でおよそ400億円を超え、そのうちの20パーセントが、日本を救おうと立ち上がった海外在住の日本人や日系人からの善意のおくりものでした。

命の恩人たち

ララとは、“Licensed Agencies for Relief in Asia”（アジア救済公認団体）の頭文字をとった略称LARAのことです。ララは、1946年6月、アメリカの宗

教団体、社会事業団体など13団体が加盟して組織され、アメリカだけでなく、カナダ、メキシコ、ブラジル、アルゼンチンなどから寄せられた救援物資をとりまとめて日本へ送りました。ララから送られてくる支援物資を受け取る日本側の窓口として、ララに加盟している13団体のうち3つの組織から、ジョージ・E・バット（バット博士・教会世界奉仕団代表）、エスター・B・ローズ（ローズ女史・アメリカ・フレンド奉仕団代表）、マイケル・J・マキロップ※（マキロップ神父・米国カトリック戦時救済

奉仕団代表）を中心とする「ララ救援物資中央委員会」が設立されました。ララ物資を積んだ待望の第一号船ハワード・スタンドベリー号は、1946年11月30日に横浜港に到着。その後1952年までに16,000トン以上の物資が届きました。



命を繋いでくれた支援物資の数々

ララの支援物資総計

16,207・89トン

自1946年11月〜

至1952年3月

- 靴（男女小児用靴、スリッパその他）
324・54トン
- 原反（純毛原反、綿布その他）
157・23トン
- 石鹼（浴用、洗濯用、薬用その他）
178・63トン
- 綿（原綿その他）
222・00トン
- 学用品その他（ノート、鉛筆その他）
186・19トン
- 衣料（洋服類、下着類、寝具毛布類、その他）
2,930・99トン
- 食料（ミルク類、穀類、缶詰類、食油類、脱水野菜、完全食、乾燥果物類、シロップ類その他）
12,145・74トン

ララ物資に貢献した
日系人「浅野七之助」

当時の日本では、ララ物資は「アメリカからの贈り物」というイメージでした。しかし、このララ物資は、アメリカをはじめとする海外の日系人からのおくりものでもあったのです。

アメリカでは、戦争中、一世はもちろん、アメリカの市民権を持つ二世でさえも強制収容所で、敵国人の扱いを受け、つらい生活を送っていました。終戦により、収容所から戻ってきた日系人たちは、財産を失い、まさにゼロからのスタートでした。それでも、食糧不足に苦しむ日本の実情を知り、アメリカ各地で「祖国日本を救済しよう」という運動が起りました。

なかでも、サンフランシスコ

では、戦前に日本語新聞の編集長だった浅野七之助が1946年1月に「日本難民救済会」を発足し、日本への支援のための募金活動を始めました。しかし、アメリカの銀行は救済統制委員会の許可を得てない募金を受け付けず、その上、「敵国だった日本人を救済することは好ましくない」との世論もあり、活動はなかなか進みませんでした。

そんな時、浅野らは、東京フ

レンド女学校の教員として日本に滞在したことがあり、日本に好意をもっていたアメリカ・フレンド奉仕団のローズ女史に日本が困っている状況を訴えました。ローズ女史は、浅野らの活動に賛同し、日本へ支援物資を送る活動ができるよう力をつくした後、来日して日本側受け入れ窓口「ララ救援物資中央委員会」の委員を務めました。

浅野は1946年5月、日本

語新聞「日米時事」を創刊し、ララ物資募集の運動を積極的に報道したことから、その活動はアメリカをはじめ、カナダ、メキシコ、ブラジル、アルゼンチンなどの日系社会にも広がっていききました。1952年の調査では、ララ物資救援活動に貢献した日系団体は、36団体にのぼるとされています。

（出展：JICA）



国内支援

西日本豪雨災害支援

本年7月、西日本を中心に各地で豪雨災害が発生致しました。中でも、川が決壊し、広範囲にわたって泥に蔽いつくされた岡山県真備町では甚大な浸水被害となりました。

れんげ国際ボランティア会ではこの度の災害に於いて、災害復旧の経験と専門的技術を有し、災害直後より支援活動を行っているグループ「風組関東」に物資の支援を行いました。

支援は、土砂や浸水家屋の後片付け用の機材類の提供です。高圧洗浄機、乾湿両用の掃除機、泥水残水の吸排水用ポンプ、床板を剥がすためのレスプロソーなど、いずれも業務用の機材です。これらの機材を使用することで、手作業の何倍も早く被災家屋の復旧が可能となり、大変喜ばれています。被災者の皆様の一日も早い生活再建をお祈り申し上げます。



熊本地震支援 (ましきっずプレイヤーズ支援)

熊本地震の震源地であり、最も被害の大きかった益城町。その益城町で被災者だった子供たちが躍動しています。「心身を解きほぐせる表現活動の機会を」と、小中学生による演劇グループが結成されました。テーマソング“ましきまちのうた”では地震のことを「キミ」と言い換え、「キミからたくさんのことを学んだ、悪い事ばかりじゃない」と歌っています。

メンバー達は歌や踊りを学ぶことで、自分たちが元気になり、それを見た親や大人が元気になり、そして被災した町が復興に向けて元気になっていく、そんなことを夢見ています。

当会ではこの子供たちの活動をサポーターとして支えています。



募金のお願い

れんげ国際ボランティア会はNGO(またはNPO)と呼ばれる民間の国際協力団体です。ODA(政府開発援助)とは異なり資金力がありません。資金的には小規模であっても、国内外の本当に必要な人々に、心のこもった支援ができるよう努力を致しております。その努力が実り、活動に関しては、外務省や現地の人々からも高い評価を頂いています(認定NPOとしても認定)。

今後もアジアの人々が日本に対してシンパシーを抱き、パートナーシップを築けるような有効な支援事業を続けてまいりたいと考えています。何卒、活動へのご理解を頂き、活動資金へのご協力を賜りますようお願い申し上げます。

会の維持運営費

各種ボランティア活動を行うためには、現地への旅費交通費、現場との通信費、事務所の維持費(本部や現地)、現地スタッフの給与などが必要となります。このように活動を下支えるための重要な募金が維持会費です。

一口：年間 5,000円

各種活動費

現在は国内の被災地での活動、チベット難民支援、ミャンマー教育支援を重点的に行っております。(金額、用途は振込用紙に記載)

■振込用紙は毎号お入れしています■

これは事務作業の手間を省くためと、「思い立ったときにいつでも振り込みできるように、いつも入れておいて欲しい」という要望があるためです。決して振り込みを強要するものではありません。恐れ入りますが、既にお振り込み頂いた方、ご不要の方はご処分をお願い致します。

第68号 2018(平成30年)10月

季刊/みろくの風(れんげ国際ボランティア会会報)

発行人/川原英照

住所/〒865-0065
熊本県玉名市築地2288

電話/0968(73)4851

◇各種お問い合わせ◇

(認定NPO法人)

れんげ国際ボランティア会

<http://reng.asia>

e-mail artic@reng.asia  @reng.artic